

漢法苞徳塾資料	No. 283
区分	論説
タイトル	湯浅泰雄氏の論の問題点
著者	八木素萌
作成日	92年夏期合宿塾長講話

◎湯浅泰雄氏の論とその問題点

まず、湯浅泰雄氏（桜美林大学教授〈哲学〉・人体科学会副会長）の論ずるところを、『人体科学会・1992年6月号』所載のものから眺めてのち、問題点を検討しよう。

1. 「…東洋医学の極意は〈未病を治す〉ところにあるという。〈未病〉というのは、まだ病気ではないがその兆候が現われている状態という意味である。いわば、病気にならないように常に気を充実させ、健康を高めることを医学の基本原理にする、と言ってもいい。…」

★問題点★

「病気にならないように常に気を充実させ、健康を高めることを医学の基本原理にする」これでは「〈未病を治す〉」のは、まるで気功を行なうことであるかのようなのである。気功は按蹻・導引の流れとは異なった独自のものである。馬王堆医書の中に導引図として「五禽戯」も書かれているのは明らかなことであり、導引を記述している部分は一卷の帛書になっており、四十四人の全身像が掲載されていること、様々な疾病に対する導引法が記述されていること、導引法には四方面つまり「徒手法」「用具法」「呼吸法」「瞑想法」と表現できる方法が記述されていることも、研究されている。現代騒がれている「気功」が、中国医学の導引・按蹻を採用していることは明らかであり、また、少林寺ほかの武術のための鍛錬法からも採用している事も明らかである。しかし、医学における按蹻・導引（今日風に言えば運動法〈自動法と他動法そしてマッサージ法である〉）とは出発も歴史も異なっている。道教の修煉法として引き継がれてきた「気功」とは別であることは、指摘しておかなければならない。歴史の中で両者の間には多くのオーバーラップする部分が生じたとしても、本来別なものであることを無視してはならない。

2. 「…近代医学ではふつうの状態を健康とみなし、病変が起こってからそれに対処するのが原則であって、保健は応用分野の問題とみなされる。これに対して東洋では、むしろ保健のほうが基本であって、それもわれわれ（患者）自身の自己努力が大切とみなされる。…」

★問題点★

なんとも言い様のない把握である。「上工は未病を治す」（名医は早期発見・早期治療にたけている）と言う記述にある「未病」概念を理解しないままに「未病を治す」とは「保健のほうが基本」の医学と「早トチリ」しているのである。

- 3・・・「…近代の学問は現象を外から観察して理論をつくるので、技術や実践は応用部門の問題とみなされる。これに対して東洋思想の伝統では、人間が生きてゆくための基本を〈わざ〉の修練を通じて人格を完成することにおいてきた。この場合は、心と身体は常に一つのものであって分けられない。宗教や哲学と心理学や医学は不可分である。気の問題は、こころ－からだ－もの、つまり心理－生理－物理のすべての領域にかかわっている。…」

★問題点★

「不立文字」の思想は、「わざ」〈術・技〉や「かた」〈型・形〉の修練の問題として把握するというのは、中国の伝統的な思想を正確に理解したものであろうか？武術にあっては〈型・形〉はギリギリに練りあげた典型であり、エキスである。現実の戦闘のさなかに成起する多種多様な変化と動態から、エキスの意味を帯びているものを抽出した上さらに練成して様式化したものである。それ故に「乱取り」「稽古」などの「模擬的戦闘」における鍛錬・訓練の上に、〈型・形〉の演武の修練が行なわれる。「稽古」と〈型・形〉の関係は相互に「術」の水準を高めて行くものである。この三者の関係（形と乱取りと技・術の三者）を忘れて「ワザの修練」「気の問題」に帰着させてしまえば、奇妙な観念や態度が横行することになる。だから、こんな形で「気」を言う事は腐敗への道を歩こうとする危険な方向を進もうとする事になる。

4. 「…近代の科学は、専門が細かく分化してゆくことによって発達してきたが、そのために全体的な見方が失われ、人間が世界の中に生きていることの意味がわからなくなっている。現代の学問には思想がない、と言ってもいいかもしれない。…」

★問題点★

.....

5. 「人体科学がめざすもの」という文章の中では「…精神－物質（哲学的にいえば主観－客観）の近代的二分法のパラダイムに対する基本的反省が求められているのではないかと思う。言い換えれば、科学的思考態度に対する方法論的な認識批判の課題が待っているのではあるまいか。…」と述べている。

★問題点★

.....

6. 医学については彼の把握と問題意識は何か？

「東洋医学は〈気〉の考え方を基本にしている。…人体には〈気〉と呼ばれる一種のエネルギーが流れている。気は陰と陽… [の] …二つの位相に分けられる。そして陰陽のバランスや、気の充実と空虚（虚実）の度合、あるいは気の流れが淀んでいるかうまく流れているか、また気が純粋であるか濁っているが、等といった観点から病気を診断したり、健康状態を判断してきた。…」

「…大きくみるとこのような見方は（ニーダムの言う～サイコソマティック〈心身相関的〉でホリスティック〈全体的〉な考え方）、みえないエネルギーの流れ、つまり液体を基本にしてすべての現象を理解するという中国の科学と哲学の伝統から来たものである。…」

「…気のエネルギーが流れるルートを〈経絡〉とよび…医書には〈通ずれば痛まず〉とあって、気の流れが停滞せず、スムーズに流れれば痛みがなくなると説いている。…経絡は血管や神経のように感覚によってその存在を知ることができないので、近代の解剖学や生理学では認められていない。…経絡のルートは皮下の体液組織の部分にあるものと推定され、他の部分にくらべて電流が流れやすいとか、どのツボが内臓のどの働きと関連しているかといったことがいろいろ調べられている。…各国でも研究がさかんになり、最近、国連の下部機関で国際的な共通のマニュアルが決められるほど普及してきている。…」

★問題点★

.....

7. ここで思い出して欲しい事柄がある。

「…紀元前 460 年生まれの医聖ヒポクラテスは、人間の体は土・空気・水・火の四つの元素から作られ、病気は体液の不調和からおこるとしました。さらに彼は、…体内の熱は生命の基本条件で、熱がなくなることが死であるとしてきました。そして熱を保つために [プノイマ] というものが大気より気道を通して体内に入り、血液とともに血管内を循環すると考えました。このプノイマは、東洋的にいうと、「気」によく似ています。…」

「…さてこのヒポクラテスの考えはプラトン・アリストテレスにも継承され、二世紀のローマの医師ガレンによってまとめられました。ガレンは「靈気」について、次のように考えました。まず消化管の食物は吸収されると、門脈〈肝臓に入る静脈のこと〉に入る。そして、肝臓で [自然靈気] を得て、血液にかわる。血液は大静脈を通過して心臓の右心房に入り、さらに右心室と左心室の間にある中隔を通り、左心室に入る。ここで血液は [生命靈気] を得、それにより心臓は神よりさづけられた熱の源になる。この血液は [潮の干満] のように各臓器に移動してゆく。そして脳に行った血液は [動物靈気] を得る。…」(高田明和：『「病は気から」の科学』P、25～26)

と言うヒポクラテスとその系譜の医学思想である。それは、医学を多少とも学ぶものにとっての常識である。

湯浅氏がニーダムのものであると言いながら、実はユング的な東洋医学像を語っているが、その内容はたとえばヒポクラテス医学の根幹を思い起こさせる体のものである。

哲学者として、或は「人間科学会・副会長」として東洋医学を公の場で語るのならば、せめて、最低限でも『類経図翼』の巻一の「五行統論」までの四図と三千二百五十四文字ぐらひは読んでほしいものである。あるいはもっと省略しても「五行統論」千六百四十八文字を研究してからにして欲しいものである。それさえも不可能であれば、丸山昌朗氏の『鍼灸医学と古典の研究』（續文堂）の中に『素問・陰陽応象大論の訓注とその研究』があるので、それだけでも読んでからにして欲しいものである。

8. 「…これは呼吸が単に空気という物質を出入りさせるにとどまらず、気のエネルギーを出入りさせることである、と考えられてきたからである。調気は調身・調心と並べてよばれることが多い。…気の訓練は、身体能力の訓練（調身）と心の潜在能力の開発（調心）を結びつける位置におかれている。…気功は現在健康法の一つとして普及しているが、…自分の内部にある気の流れを活発にし、心身の気の陰陽・虚実の全体的バランスをよくし、それをより純粋な性質に高めるのが内気功である…外気功（について説明する）…気の訓練は、医学の立場からみれば、そういう自然治癒力（ホメオスタシスの復元力〈回復力〉のことと説明）を内部から強めて行くという意味合いを持っている。自然治癒力は、いわば人体の潜在能力ともいえるが、それを開発し、より活発にはたらくようにするわけである。…」

★問題点★

.....

9. 『鍼灸医学と古典の研究』（創元社・丸山昌朗）の「第一編 基礎概念の研究」の中で「経絡治療は、素問・靈枢・難経に述べられている経絡説を遵法している。この医学説は、陰陽五行説を論理として構築している。この陰陽五行説は、呂氏春秋から淮南子に至って大成されたものである。この呂氏春秋・淮南子の二書の根本思想は、莊子・列子から発した〔気〕の哲理である。また、この〔気〕の哲理から、経絡の中を行くものを、營気・衛気とする考え方が案出され、また「神気を守る」という鍼術の奥義も形成されたのである。この故に経絡説の本質を認識し、経絡治療の真髓を会得するには、〔気〕とは何か？というテーゼが最も重要な問題となるのである。」と書いており、「すなわち中国古代の哲学では、空間と時間－四次元の世界における、事物の現象の実体を〔気〕と呼称したのである。」「この生命の問題に関する最も古い思想は、莊子の知北遊篇中にある「人の生は気の聚りなり。聚れば則ち生となり、散ずれば則ち死となる」と。この故に生命の原基である「神明」も、すなわち〔気〕である。」などのように記述している。

「莊子・列子から発した〔気〕の哲理」と言う表現を、中国思想史・中国哲学史の中で、莊子・列子の思想的な特色を「気思想」家として把握している証拠であると言えるものであろうか？面倒であっても、中国思想史・中国哲学史などの専門書と莊子・列子および莊子の師と見られている老

子を研究したり紹介している専門書を通読する必要があると言うものである。それは「タオの思想」と呼ばれているものである。「タオ」とは「道」のことである。老子・荘子の思想は「無の思想」とも呼ばれるものである。

書中に「[気]の哲理」を論じている事と、その書の著者が「気」の思想家であると言う事とは同じではない。違うものを同じものと受け取るのは〈早トチリ〉と言うものである。

◎湯浅泰雄氏（桜美林大学教授〈哲学〉）は哲学者であるが、近代心理学の一つのピークである「ユング」の研究で知られる。その研究が、近代の思想のパラダイムに対して、新しいものを提示できるような力量をもった質を備えているか、こういう専門的な評価の程は、私が哲学の専門家では無いし、「ユング」が問題にされたのは、彼の論が認識論の問題と関係が深いからである点で、量子力学成立の前段階における認識論の問題と、第一次世界大戦後の社会的激動の時代の思想の根幹にある問題、との関連で問題にされた心理学者である。という程度にしかユングを知らないのであるから、論じる資格は無いと心得ている。だが、ことが東洋医学に関する認識と言うことになると、私の方が湯浅氏よりも専門度が高いので、この部分については、発言できるものと思う。

1. 彼の東洋医学観は、どんな研究によって形造られたのか、問い質したいと思うほどに、不思議なまとめ方である。古漢語も中世漢語も現代中国語も読めて、自分の目で、重要な典籍をどの程度調べたのであろうか？正当であるかどうかは別にして、きわめて要領が良い通俗的なまとめである、と思う。
2. 通俗的と言うのは「気のエネルギーが流れるルートを〈経絡〉と呼び」と言う表現に見られる。現代医学が認めていないものを通俗的に説明しようとするとき、簡単に言えばこんな風に言えると思いますよ、と言うレベルの説明である。それだけに、途方もない誤謬になりやすい方向性を帯びている。
3. 独善的でもある「……みえないエネルギーの流れ、つまり液体を基本にしてすべての現象を理解するという中国の科学と哲学の伝統から来たものである（このような中国の哲学と科学の思想の特質は、古代の易経の考え方までさかのぼることができる）。これに対して西洋の場合は、昔から固体（実体）を基本にして現象を分析するという、原子モデルのような考え方が基本になっている。」と言うのである。一つずつ検討を加える価値も無いほどに、およそ哲学者らしからぬズボラ極まりない言葉の使い方である。語彙概念がアイマイである程、思考はボヤケタものになることは論ずるまでもないことである。
4. 通俗的に要領よく通俗語でまとめていてジャーナリスティックでもある。